

保育者養成校におけるピアノ初学者への学習支援の在り方

— 習熟度別グループ編成による実践 —

長嶺 章子¹ 石井 恵子³ 石井 博子² 石橋 葉子²
糸日谷章子² 柴辻 純子³ 水村 明子² 山中 和穂²

How to Support Learning for Piano Beginners at the Nursery Teacher Training School: Lesson in a Group by Proficiency Level

NAGAMINE Akiko ISHII Keiko ISHII Hiroko ISHIBASHI Yoko
ITOHIYA Akiko SHIBATSUJI Junko MIZUMURA Akiko YAMANAKA Kazuho

本稿は、短期大学保育者養成課程1年生のピアノの授業（保育の表現技術I（音楽表現））を対象に試みた、習熟度別指導の実践報告である。この授業は必修科目であり、1クラス約50名の学生に対し、8名の教員による個別指導を実践している。履修者の習熟度は、初学者から長期間にわたって学習している者まで多様である。以前は、各グループ内に多様な習熟度の学生が混在するグループ編成を採用していた。この編成においては指導時間の公平性や学習者心理への影響等において課題があった。そこで本実践では、習熟度が同程度の学生によるグループ編成を試みた。その結果、指導時間の不平等が是正され、各自の習熟度に適した内容で指導することが可能となった。さらに、学修上の配慮を必要とする学生に対し、より適した支援をすることも可能となった。

キーワード：保育者養成教育、音楽教育、ピアノ指導法、習熟度別

I 概要

1. 問題の所在

保育者養成におけるピアノ教育は、職業上必要な技能を習得するための必修科目である。本学は、ピアノ初学者が多いが、2年間という短期間で両手でピアノ伴奏をしながら歌唱する、いわゆる弾き歌いの技能習得が求められる。学習到達目標の高さに対し、学習環境および条件は決して万全とはいえない。通常、ピアノ教室では、各学習者への個別指導が毎週1回40～60分間程度行われる。また、数年以上の長期間にわたり同じ教師と生徒とが信頼関係を築くことにより相互に理解を深め、各自に適した課題を設定して学習意欲を高めながら指導を進める。これに対し、保育者養成課程の授業では、1名の教員に対し6～7名程度の学生のグループを編成

し、毎週1回90分間の授業で1名当たり10分間程度の指導時間となる。また、教員が非常勤の場合は学生との授業時間外の交流がない。さらに、授業回数も半期15回、年間30回と限られており、教員と各学生が相互に理解を深め信頼関係を築いて授業を展開することが、ピアノ教室に比べて難しい。このように制約の多い指導環境の下で、学習意欲を維持向上させ学習到達目標に達する指導を行う方法について、常に検討が求められている。

2. これまでの授業形態および問題点

グループ編成の方法としては主に、①習熟度が同程度の学生による編成、②多様な習熟度の学生による編成の2種類が考えられる。

これまでは、多様な習熟度の学生による編成を採

1 植草学園短期大学

2 植草学園短期大学 非常勤講師

3 植草学園短期大学・植草学園大学 非常勤講師

用していた。この編成のもとでは、初学者の理解が不十分な箇所について経験者が教えるといった教え合いが自然に行われた。同級生に教える学生は、知識・技能の再確認になるし、教わる学生にとっては、同級生の演奏が刺激となり、学習意欲が向上したり、目指す演奏のイメージが明確になることにより楽曲の理解につながったりするというように、双方にとってプラスの作用がはたらいた。しかし一方で、教える・教わる関係が固定化すると、ピアノ初学者にとっては、常に自分よりよく弾けて知識もある同級生の存在は、目標となる場合もあるが、反対に常に同級生より演奏技能が劣ることを自覚させられ、自信を失わせ学習意欲を減退させる場合もある。プラスとマイナスどちらの結果になるのかは、当人の性格や学習者間の友人としての関係性など、心理的な要因が複雑に影響し合うため、千差万別である。さらに、この編成には習熟度の高い学生にとっても問題点があった。初学者は経験者と比べて必然的に指導に時間がかかる。そのため習熟度の高い学生は、同一グループ内の初学者と比較して指導時間が短くなる傾向にあり、学習条件の公平性の点で問題があった。

また、別の問題として、学修上配慮を必要とする学生、すなわち家庭状況や友人等との人間関係にストレスを抱えていること等により、学習意欲が減退している、通学に困難を感じている、あるいは進路に迷いが生じている等、ピアノの学習に専念できない要因を抱える学生も少数ながら存在する。こうした学生に対しては、生活背景にまで配慮したピアノ演奏指導が必要となるが、制約の多い指導環境下では十分な対応が困難であった。

このように、これまでの多様な習熟度の学生による編成における問題点は大きく分けて3点あった。第一点は習熟度により指導時間が不平等になること、第二点は初学者の学習意欲が減退する可能性があること、そして第三点は学修上配慮が必要な学生に十分な対応ができないことである。

3. 習熟度別授業の有効性に関する報告

習熟度別授業は、主に小中学校の算数・数学・国語・外国語等の授業で導入され、子どもの学習意欲が高まることが報告されている（明石・石川，2003）。

習熟度が同程度で少人数の授業においては、子どもの理解度に応じた授業が可能となり、質問や発言が活発になり、授業がわかりやすくなる。また、教師の個別指導が行き届くようになることも、子どもの学習に対する満足度が上がる要因とされる。ただし、明石・石川（2003）は所属クラスを子どもが自分で選ぶことが重要であるとしている。自分で選ぶことにより、意欲と満足度が増し、結果的に学力が伸びるといっているのである。しかし一方で、問題点も指摘している。新たな概念を獲得する際に、習熟度が低い子どもだけで編成されたクラスでは質問や意見等の発言が少ない。こうした学習においては、多様な習熟度の子どもによる多様な意見に触れる機会が大切になる。

さらに、佐藤（2004）は、わが国で習熟度別指導が普及したことについて、欧米における研究事例を根拠に時代錯誤であると指摘し、真っ向から反対している。例えば読み書き・計算等の基礎技能を身につけるだけなら習熟度別指導が有効なのは明らかであるとしながら、学校教育の最終目的はそこではないのであり、それは授業時間外の補講等で行うべきと指摘している。学習とは他者の意見に耳を傾け、自分の考えとすり合わせ、新たな概念を獲得していく過程なのであり、対話と協同学習こそが学力を高めると主張している。

保育者養成課程のピアノの授業における習熟度別授業に関する研究は、ピアノ演奏技能習得における習熟度による脳内処理の差を調べた研究（藤間・中平，2014）、習熟度別の課題ノルマ制の効果を検討した研究（北村・平澤，2009）等、数件が見当たりますが、学習意欲や生活全般を含めた支援に着目した事例は見当たらない。

4. 本実践の目的

以上の議論から、この授業のねらいはピアノ演奏の基礎技能を身につけることであるため、習熟度別指導は有効であると考えられる。ただし、有効なのは技能習得に限定的であり、保育者としての音楽表現指導法に関する豊かな発想や実践力等を身につける際には、佐藤（2004）において指摘されるように、他者の多様な意見や発想に触れることが重要であるといえる。

そこで、本学の2年間全体の音楽表現に関する授業（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ）を表1のように設定し、ピアノ演奏の個別指導を主体とするⅠ，Ⅲについては習熟度別グループ編成、協同学習を主体とするⅡ，Ⅳについては混合編成を採用する。2年間の学習の最初にあたる本実践（Ⅰ）では、授業のねらいおよび学習到達目標をピアノ演奏の基礎技能習得と楽典の基礎学習に焦点化し、習熟度別指導を試みる。実践の結果、各教員の考察を共有することにより、習熟度別グループ編成の効果と課題について検討することを本稿の目的とする。

表1 課程全体の音楽表現に関する授業の概要

| | |
|-------|------------------|
| 音楽表現Ⅰ | ピアノの基礎技能習得・楽典の基礎 |
| 音楽表現Ⅱ | 合唱の基礎技能習得 |
| 音楽表現Ⅲ | ピアノ弾き歌いの基礎技能習得 |
| 音楽表現Ⅳ | 幼児の音楽表現指導法 |

5. 実践の対象および方法

- (1) 授業名：保育の表現技術Ⅰ（音楽表現）
- (2) 授業の期間：201X年前期・全15回
- (3) 対象者：本学1年生に在籍する101名（全2クラス）
- (4) 教員1名当たりの担当学生数：6名～7名
- (5) 教材：『おとなのためのバイエル教本（実用的なバイエル習得法）』、板東貴余子・本間正治著、ドレミ楽譜出版社、2015年
- (6) 授業の方法：教本の中から、教員間で規定曲を決めておく。ただしノルマとはせず、各学生の習熟度や好み等に応じて、意欲的に学べるよう配慮しながら個別に対応した課題を課す。
- (7) 学習到達目標：
 - ①保育に必要なピアノ演奏技術を身につける。
 - ②音楽の基礎的な理論を学び、楽譜に書き表されていることを理解できるようにする。
- (8) 倫理的配慮：

対象となる学生については、プライバシー保護の観点から記号を使用し、学生に関する記述については、本質が損なわれない範囲で個人が特定されないよう変更を加えた。

6. 習熟度別グループ編成の方法

習熟度は4段階に分けた（表2）。分類の特徴は、単にピアノ演奏技能の段階のみで区切るのではなく、各自の性質や生活状況にまで配慮したグループを設定した点である。初回の授業において、全体説明の後、学籍番号順に8つのグループに分かれる。8名の教員それぞれが1グループを担当し、各学生にふさわしい習熟度グループを検討する。

習熟度の判断基準は、音楽学習歴のアンケート調査、入学前に課した演奏課題の結果、およびグループ内での他の学生や教員との交流の様子等である。交流の中で、緊張や不安が強いタイプ、物怖じせず挑戦するタイプ等により、習熟度が低いクラスの方が意欲が持続するタイプか、少し高い習熟度グループで意欲が増して実力をつけるタイプか等を判断する。

表2 習熟度の内訳

| | |
|-------|--|
| Nグレード | 学修上配慮を必要とする学生を含む初学者で専任教員が担当する。 |
| Aグレード | 初めてピアノを学ぶ。 |
| Bグレード | 過去にレッスンを受けた経験はあるが、基礎から再確認が必要。 |
| Cグレード | 長期間レッスンを受けた、あるいは継続しており、入学前課題の演奏もよくできている。 |

Ⅱ 実践報告

本章では、各教員の授業実践の過程を記述し、考察する。以下、各教員の実践について報告する。

Nグレード：学生生活全般に配慮した学習支援

1. 概要

このグループは、学修上なんらかの配慮を必要とする学生を含むグループである。入学当初、環境の大きな変化への適応が難しい学生も存在する。高校までとは大きく異なる専門科目の授業への適応、初対面の同級生や教員と打ち解けること、また生活リズムの変化等への適応にかかる時間には、個人差がある。また、家庭状況・経済状況等の、当人の意思ではコントロールが難しい諸事情も、授業への出席や日常のピアノ練習に対する意欲や集中力に少なからず影響する。こうした学生は、専任教員が専攻の

各教員と連携し、授業時間外のコミュニケーションも図りながら支援することが適切であると考え、専任教員のグループに配属し支援することにした。

2. グループと学生の概要

(1) グループ1 (4名)

- a：前期（対象授業期間中）は、環境への適応が困難であり、終始寡黙で学習意欲も低かった。
- b：家庭状況に課題がある。
- c：ピアノは幼少期に強制的に学ばされたが上手くできなかった記憶が残っており、不安が強い。
- d：初学者であり、なおかつ長時間のアルバイトと並行して学ぶため、練習時間の確保が困難。

(2) グループ2 (5名)

- e：当初、極度の緊張から会話が難しく、打ち解けるまでに長い時間を要した。ピアノおよび音楽に対する苦手意識も強いが、時間をかけて緊張をほぐし、次第に意欲も向上した。
- f：当初、Aグレードに配属されたが、同グレード内で進度に差が開いていく過程で意欲を失い、欠席が続いたため、このグループに移籍した。
- g：意欲はあるが、大学生活全般において不安・緊張が強く、配慮が必要。
- h：当初不安や緊張、さらにピアノや音楽への苦手意識も強く、適応に時間を要した。回を重ねるごとに当人の得意分野についての会話などから緊張がほぐれ、ようやく意欲が向上した。
- i：ピアノの学習経験はある。遠距離通学および長時間のアルバイトと並行するため、練習時間の確保が困難であったが授業が進むうちに意欲が向上し、学習のために勤務時間の調整を図るようになった。

3. 指導における工夫および留意点

以上の通り、ピアノ演奏技能の習熟度以外に配慮が必要なグループであるため、学習に向かう足場づくりとして、個別あるいはグループ全体での日常会話の時間を設け、各学生の得意分野等、音楽以外の側面への理解を深め、受容・共感の態度を示すことにより、信頼関係を構築することを重視した。個別の会話の過程で強い不安や緊張等が見られる場合、他教科の専任教員との情報交換をもとに、単にピアノ

演奏についての緊張なのか、それとも生活面の出来事が影響しているのか、あるいは担当教員（筆者）との関わりに原因があるのか等を探った。そのため、初学者だからといって急いでピアノ演奏の習熟度を上げるためだけに詰め込み式に多数の課題を課すことはしなかった。緊張がほぐれて笑顔が見られるようになったところで、ピアノ演奏の具体的な練習方法等の話題を徐々に増やし、意欲を向上させるよう留意した。

4. 結果と考察

学生 a は、前期終了まではたいへん寡黙で消極的な様子であった。しかし、他教科の専任教員と情報共有し常に配慮することや、学生自身の実習等を通じた様々な体験の積み重ねにより、徐々に環境に適応し、後期にはまるで人が変わったように本来の明るい人柄が現れ、現在では学習意欲も向上しつつある。こうしたことから、本実践の対象期間に最良の結果が出なくとも、2年間全体、あるいは就職後への接続までを視野に入れた長期的な視点で支援することが必要である。

また、学修上なんらかの困難を抱え技能習熟度も低い場合でも、適応することにより意欲が向上する学生も存在した。現に、授業時間だけでは指導時間が足りないと感じた3名の学生（e, h, i）は、新しい環境へ適応した時期からピアノ教室に通い始めた。このように心理面で問題が解決することにより自己調整学習（課題を達成するための学習方略を自分で考え実行すること）ができるようになる者もいる。また、楽典の筆記試験は平均点が41.5点（50点満点中）と、理解力については極端に低いわけではないことから、心理面や環境面が実技学習の結果に与える影響については今後も配慮していきたい。

一方で、学生 a のように大学生活への適応が前期の最後まで困難であった者や、学生 b のように家庭状況の問題が解決しない者は、自己調整学習が困難であった。これはあくまでも本対象者における結果ではあるが、学習に専念できる環境と自己調整能力には関連があることも考えられる。

5. 今後の課題

本実践の特徴のひとつである、技能習熟度のみでなく周辺環境および心理面からアプローチする学習支援においては、評価の方法が課題である。期末の実技試験の演奏評価のみでは、学習意欲の向上および努力の程度は反映しきれない。当グループの学生は、演奏技能習熟度について著しい向上が見られず学習到達目標に達しない場合もある。しかし、意欲や向上心については評価に値する変化を見せる者もいる。こうした場合に、容赦なく低評価をすることは果たして妥当な評価といえるであろうか。筆者は最終的な演奏結果のみならず、学習過程における特筆すべき変化をも含めて総合的に評価したいと考え、学習者の意欲・態度を評価項目に加えている。しかし、こうした項目を数値で評価する際の基準が必要となる。現在は各教員の主観による評価となっている。今後の検討課題である。(長嶺章子)

A グレード①：初心者を中心としたグループでの試み

1. 概要

今年度の筆者の担当は、全くの、もしくは、ほぼ初心者が中心で、その中に短期間の既習者が1、2名混じったグループであった。昨年度までの混合グループとは異なり、進度のばらつきが少なく、学習の同時進行が期待できるグループである。既習者に比べ、なかなか練習の習慣が身につかない初心者の場合も、一斉スタートならば進度が比べ易く、必要練習量の過不足が本人にも理解させやすい。自己練習が欠かせないピアノ学習の決め手を、今までより明確に指導出来る。

2. グループと学生の概要

(1) グループ1 (7名)

- a：寡黙で学習の経験値は著しく低いが、遅刻もせず、地道に努力した。
- b：むしろ中級。落ち着いている。
- c：明朗で前向き。努力して集中力もある。
- d：資質あるに拘わらず、授業を全く自分のものとしなかった。
- e：活発で頭の回転が速い一方、早合点。
- f：明朗で確実。良く伸びた。
- g：明朗かつ真面目。器用ではないが中級のプライ

ドを持ち、良く練習する。

(2) グループ2 (7名)

- h：新鮮な気持ちで授業に関心高く、積極的に取り組んだ。
- i：頭脳明晰な中級者。孤高な雰囲気。
- j：真面目な中級者。当初、学習で少々の外れな面を次第に克服。
- k：進度に合致。
- l：意志が強く前向き。自分に厳しく良く努力する。
- m：少々怠惰。
- n：面白味あり。進度に合致。

3. これまでの問題点

昨年度までの、名簿順グループでは、全くの初心者から、ショパンを弾ける学生まで、そのグレードはまちまちであった。その為、次回の課題のレベルにも当然大差があり、学習の留意点の説明は、勢い個別にならざるを得ない。短時間で多数の学生を指導する授業において、効率の面では困難であった。初心者に割く時間はどうしても長くなり、この授業の修了目標を遥かに越えている学生には、短くなる。自主的に学習出来る力に委ねて、本来15時間で、音楽的にもテクニク的にも、更なる高みや深みに到達出来る指導時間を、取れなかった。進んでいる学生からは「時間配分」の不満も聞かれた。しかしながら、グループ全員が課題を修了する事を目指す時、例えば短い1曲に10分かかかる学生が、他の学生の授業時間を奪わざるを得ない事態は、多々あったのである。

4. 習熟度別指導における工夫および留意点

今年度はグループにより雰囲気がかなり異なったので、各々に述べたい。

(1) グループ1：明朗快活な学生が多く、遠慮のない親しい雰囲気。寡黙な学生も、疎外感なく居ることができた。課題の解説は同時に始めた。初心者同士同じ曲を互いに聴き合うことで、自然な競争心が生まれた。大変不得手な学生が、遅れまいと、練習に長時間かけるようになったのは、瞳目に値する。その学生は昨年度の習熟目標曲には達せられなかったが、今年度としては合格出来た。

また少し進みの早い学生が、自信を得たことから良い意味でのプライドが表れ、意欲が増して進度が上がった。

一方、学生dは、能力があるにも関わらず、欠席がちでピアノ学習が身につかなかったことは残念であった。

(2) グループ2：全体に真面目なグループだが、緊張感が強く、最後まで打ち解けなかった。

初心者向けの授業内容で開始したが、ほどなく、実はかなりグレードの高い学生が2人混じっていることがわかった。1人は、既習内容を聞くのは退屈、もう1人は、ピアノはある程度弾けるが基礎知識は足りないのも、その溝が埋まり確実性が増した。意欲の差から、次第に進度にも差が出てきた。同グループ内で習熟度が高い学生は、促しても周りに合わせてか、能力の割には目覚ましく習熟度が上がることはなかった。グループ1とは異なる展開だったが、グループごとの雰囲気要因かもしれない。

5. 結果と考察

習熟度別指導の最大の利点である「同じ課題に同じ諸注意」で行える指導は、大変効果的で、学生の理解も早かった。ひとつの課題曲を授業中、代わる代わる弾くことで、聴覚からの学習も深まり、発達をより促した。

ただ、刺激を受けて伸びる学生もいる一方、学生dや、学生mのように、マイペースで落伍や遅滞する学生もいた。また、著しい上級者が居ないので、高度なテクニックや楽曲を身近に触れられず、ピアノ表現の可能性を広く理解する機会はなかった。

筆者が以前受けもったグループに、上級者ばかりに混じって、1人初心者だった学生がいた。その学生は、同級生の弾く名曲に深く感動してピアノを大好きになり、練習に励んだ。課程を無事修了しても練習を続け、好きな曲を次々に弾けるようになったのである。

このように、一緒に学ぶグループによって良い影響を受けるか受けないかは、学生の性格や感性、そして今まで培ってきた習慣による面も大きいのではないだろうか。英語や数学などに比べ、保育におけるピアノ学習の進み具合は予想が付きにくい。幼児

からでも始められるピアノは、気の効いた大学生にとっては、初心者でもやる気になれば短時間である程度身につけられる。しかし、努力する習慣が身につけていない学生にとっては、グループの特徴にも関心がなく、結果的に習得が難しいのである。

習熟度別編成は、むしろ指導する側に、利点や工夫のしがいがあるように筆者には感じられた。指導の効率化により、各学生への指導時間配分も、ある程度是正することが出来た。今年度は規定曲設定に自由度があったのも幸いして、初心者の多いグループでも全員合格することが出来た。

6. 今後の課題

筆者の初心者グループには、配分の都合で中級者が混じっていた。もし全員が完全な初心者であったなら、また違う展開だっただろうか。今回、進度のばらつきは次第に広がり、指導時間の差も、今までより少ないものの、やはり生じた。

学生は自己評価が低い場合があり、グレードは実際弾かせて聞いてみないとわからない場合もある。今後は、習熟度をより絞ったグループで実践出来たなら、また違う学生の反応も見られるかもしれない。学生の意欲と資質を、ピアノ学習を通してなるべく最大限に伸ばす為、習熟度別グループ編成での指導の工夫を今後も重ねていきたい。(石井恵子)

A グレード②：初心者クラスでの楽典及びピアノ指導について

1. 概要

昨年までの混合クラスとは違い、楽典とピアノを同じ教員が行う。同レベルでのスタートで、劣等感を感じる事が少なく、学習意欲が高まるのではないかと期待してスタートした。

2. グループおよび学生の概要

- (1) グループ1 (6名) 初心者4名、既修者2名
- (2) グループ2 (7名) 初心者4名、既修者3名

ピアノが全く初めての学生と幼少期に数年学んだことのある学生数名とを合わせたグループ構成となった。

3. これまでの問題点

これまでは、レベルの様々な学生が混在していた。混合クラスの指導では、初心者にさく時間がどうしても多くなり、自分で課題を進めることができる学生のレッスン時間が短くなってしまいう傾向にあった。そのため、必要な音楽表現技術について、より深い学びにつなげることが難しかった。学生によっては、自分が初心者と比較して演奏できることに満足し、能力向上に努めない場合もあった。初心者の学生は、既習者の演奏を聴くことで、「こんな風になりたい」と学習意欲が高まる場合と、「自分なんて」と低くなる場合とにわかれ、演奏技術の差が開きすぎていると学習意欲が減退することもあった。

4. 習熟度別指導における実践事例及び考察

習熟度別グループ編成であったため、初心者の指導のみを考えて展開した。楽典に30分、残りを個人レッスンにあてた。レッスンの待ち時間に当日の楽典内容のプリント課題を課し、その課題を教員が添削することにより理解度を確保でき、ピアノの指導にも繋げることができた。初心者は、楽譜が読めないことにより学習意欲が減退することがあるため、簡単なソルフェージュやリズム練習も取り入れた。習熟度別クラスにより、楽典の学習進度もほぼ同じであり、ソルフェージュやリズム、プリントにおいて、全員一斉に同じ課題を課すことができた事は利点であった。

ピアノ技術に関しては、混合クラス時のような技術の差による学習意欲減退を避けるため、平日頃より他人と比べず前回の自分よりどれだけできるようになったかを意識するよう伝え続けた。

学生 a は、初心者で両手を独立させて動かすことが困難でバイエル3番からのスタートだったが、前回よりできるようになった事を毎回指摘し、小さな達成感を何度も経験することで学習意欲が高められ、授業終了時には70番台にまで技術向上が見られた。学生 b もレッスンで溜息をつき、なかなか出来ないことに苛立ちを見せることもあったが、具体的な練習方法を一緒に経験し、成功経験を積み上げることで、着実に力をつけ49番にまで到達できた。学生 c は緊張度が強く、技術的には問題がないのに演

奏が止まってしまい自信を失っていたため、緊張した時に力が入る身体の部位を指摘し意識的に力を抜くことを指導した。また歌唱の伴奏においては、仮にピアノを弾き間違えてもテンポを維持して演奏を続ける技術が必要なことを説明し、具体的な練習方法を伝えた結果、初回の小テストでは止まってばかりだったものが2回目は一度も止まらずに演奏することができ自信に繋げることができた。習熟度別クラスに限ったことではないが、学生が短いレッスンの間に、少しでも「できるかも」「できた」と実感できれば、学習意欲向上に繋がることは上記の事例で明らかである。特に習熟度別初心者クラスでは、初めてピアノに触れる中で不安を抱えることも多く、上記のように自信を持つことが今後の更なる学びに繋がっていくと考える。

一方で、学生 d は同じ習熟度のクラス内であってもピアノ課題の進度に差がついてしまい、欠席が続いてしまった。結果、Nグレードに移籍し補講を行いながらゆっくりと練習を進めることになった。これは習熟度別クラス編成だからこそ、他の学生との差が更に目立ってしまい、学習意欲が減退してしまった事例である。この事例は、習熟度別クラスであるがゆえに、楽典は他学生と同じ進度だとしても、ピアノの技術が同じ進度で進めなかった場合、他の学生と比較して自信を失い、混合クラス時と同じ問題が起こりうるということが明確になった。

5. まとめと今後の課題

習熟度別クラスにおいて、楽典の定期テスト及びピアノ実技試験において不合格者はでなかった。15回の授業での進度は、80番台4名、70番台3名、50番台1名、49番3名となった。このように習熟度別クラスは、教員が楽典とピアノの両面から学生を理解することができ、よりよい方法で学生のピアノ技術向上を手助けすることができると考える。学生は、演奏技術の差が開きすぎることがなく同レベルでお互い質問しやすい環境にあるためか、練習中に教え合う場面が多くみられ、課題曲も重なることが多く、他者のレッスンを意識的に聴いて学ぶ姿も見られた。既習者にとっても、演奏技術の差が開きすぎることがないため、そこで満足せず、かえって他の学生より少し弾けることが自信になり学習意欲を高め

ることに繋がった。楽典の進度も揃えられることで、リズムや読譜の練習において劣等感をもつことなく、皆でできるまで練習することができたのも習熟度別クラスであったからといえるだろう。ピアノの面においても楽典の面においても「学び合い」ができることが習熟度別クラスの利点であったと言える。

しかし、「学び合い」の側面が強くなることで、技術的に進度に差がつき、「学び合い」ができなくなることで、習熟度別クラスであるがゆえに、学生dのように劣等感を感じ、著しく学習意欲が低下してしまう場合があった。初回のレベル分けの判断方法、声かけ方法、早期より補講を行えば回避できたか、など今後の課題として考える必要がある。

(石井博子)

A グレード③：初心者グループにおけるピアノ教育 1. はじめに

習熟度で分類すると「初心者」に属する学生14名を指導した。昨年度のグループ分けでは「経験者」と「初心者」がグループに混在していた。習熟度別指導にしたことにより、どのような効果が認められたか、反対に課題があるとすれば何か、そして個々の問題点について考察する。

2. 昨年度の状況と課題、その対応

経験者と初心者が混在しており、演奏技術の習得・向上に当たっては、一人当たりの指導時間は、学生の技量に合わせて変化をつけた。

経験者に比べ初心者は指導時間が長くなる。経験者は、楽譜の読み方、指番号の判断、そして何より練習のやり方を理解している。初心者には、楽譜の読み方、鍵盤の位置、指番号、音、リズムの説明が必要となり、時間が多く必要となる。

「私はできないから」とピアノに消極的になってしまった初心者の学生がいた。授業が進むにつれ、楽譜に何が書いてあるのか、自分がどのようにすれば良いのか分からないと不安になっていた。この学生の場合、どうしても他の学生よりレッスン時間が長くなってしまった。この学生にとっては、どこがどう不安なのか、何ができないのかと考え、不安な所を解消するために、指番号と始めの鍵盤の位置を毎回示し、確認をした。するとゆっくりではある

が、理解ができるようになってきた。このような場合、時間も心理的な支援も必要となることが明確になった。

なお、指導に当たっては、毎週順番をローテーションにすることで、可能な限りレッスン時間に偏りが無いようにと工夫した。

3. 習熟度別指導の効果

筆者の担当グループはいずれも初心者で構成されているため、楽典はグループ内で共通の指導ができるようになり、その理解度に合わせて、ピアノを指導できるようになった。指導する側、受ける側双方にとってかなり効率的であったと言える。すぐ一つ先の目標が明確になり、学生同士で互いに聞き合い、わからないところを共に解決していく姿をみることができた。その結果として、グループの雰囲気も良くなり、切磋琢磨して演奏技術の向上に繋がったのである。初心者のグループで学習することにより、分からないことをすぐに質問できる雰囲気、学生同士で演奏を聴いて、良い点を褒め合い、学習すること、また一歩先に目標設定が出来ることで、今年度は学生が効率良く、学習することができた。

4. 結果と考察

このように、習熟度別グループ編成にした効果は十分にあったと認められる。また、「2」で述べたケースが一定程度の割合で顕在化していることを考慮すれば、「習熟度別グループ」に分けた方が、根気強く問題に向き合える環境が整うことになり、学生のメンタル面においても、大きなメリットがあると考えられる。

5. 習熟度別指導における留意点と課題

ただし、初心者と経験者が混在するグループ編成の場合、色々なレベルの演奏を聴くことが出来て、特に初心者にとっては刺激が得られるという点を指摘したい。

経験者の演奏を聴く事により、「私も早くあんなふうに弾けるようになりたい」と具体的に目標設定ができる。経験者に質問をしたり、弾いてもらったりすることで、初心者は上達も早く、また経験者も演奏を聴かれること、質問されることによ

り、更に上達するという相乗効果が十分に期待できる。このことは「習熟度別で分けない」ことの利点である。

初心者ばかりになった時、より高いレベルの演奏を聴くことが出来ないという点では刺激が薄れ、ややもすると目標設定が低くなってしまうことは注意しておきたいことである。こんな程度で良いのかと思ってしまう、そのレベルの演奏に満足して、技術向上が止まらないように指導していくことが必要である。

保育者としてピアノを弾く場合、まず保育者自身が音楽表現を楽しみ、その楽しみを子供たちと共有することが大切である。決してピアニストのような演奏をすることが目的ではない。自分の力で楽譜を読み、練習を重ね、十分に弾けるようにすることが重要である。自身のピアノ技術の向上心を持つためにも、授業の中で、習熟度別グループ編成だからこそできる基礎からのレッスン、技術向上のためのさらなる工夫が必要であると考え。 (糸日谷章子)

Aグレード④：無作為編成から習熟度別編成への変更を試みたグループ指導の初年度報告

1. 担当グループと学生の特徴

筆者はAグレードの7名ずつ2グループを担当した。幼少期に短期間ピアノを習い中断した者や、進学決定後に習い始めた者もあったが、その理解度は低く、全体として鍵盤のハの位置の確認やト音記号の書き方などからの説明を要する水準であった。例外として、ピアノ長期経験者が1名含まれていた。

2. 指導方法

楽典

毎回の授業において、その回の内容に関する課題プリントを宿題とした。授業の冒頭に、前々回の宿題で躓きが多かった箇所の解説と、前回の宿題の質問を受け付け解説した。

レッスンの待ち時間は楽典の基礎練習（リズムたたき、写譜、音名よみ）を、二人組で行った。

ピアノ実技

前回の授業で進度の遅いものからおこなう。授業が進むにつれて、進度の速い学生は固定される傾向にあった。最も進度の速い最終者は時間が短く、時

間外でのレッスンとならざるを得なかったため、最後の学生が前回と同じ学生にならないよう配慮した。

3. 学習到達度

楽典の筆記試験結果は、中間試験が平均43.4点、期末試験が平均44.5点（いずれも50点満点中）という結果になった。

ピアノ実技は、昨年度までの初心者の最終到達目標曲（おとなのためのバイエル教本79番、80番、82番のいずれか）にたどり着いた者が、グループ1は4人、グループ2は3人であった。これについては、昨年までの初心者のほとんどが、目標曲以上に到達したことと比較すると改善を要する結果となった。

4. 考察

習熟度別編成での指導体制は、楽典においては成果があり、ピアノ実技においては、担当人数を少なくするなどの対策により有効となるかもしれない。

楽典

少人数で均質な集団であったため、一斉指導が行いやすく、指導から浮きこぼれたり、落ちこぼれたりする学生が減少した。躓く箇所が同様となる傾向もあり課題設定が容易であった。学生には、周囲の理解度が自分と変わらないという安心感が生じ、質問をしやすい雰囲気となった。リズムたたきや音名読みなどの楽典の最初歩の練習に関しても、学生間で励ましあい和やかに行う様子が見られた。

保育者は、未経験の曲を楽譜のみで短時間で習得しなくてはならない機会も多い。今回の変更で楽典に関する到達度は以前よりも高まったため、将来保育士としての実践業務により有用であるカリキュラム内容となった。

ピアノ実技

習熟度別指導の利点は、演奏方法が理解困難な部分（スタッカート、タイ、D.C.等）がグループ内で同様の傾向を示すため、課題で行う演奏方法を、一斉に説明し、実演提示できる点である。

心理面においては、自分に自信が持てないタイプの者にとっては、実力の差が小さい集団に所属することでの安心感により、のびのびと実力を発揮でき

る可能性が高い。グレードにおいて境界の実力にある者にとっては、目標設定が困難となり能力を伸ばすことが困難となりやすいといえる。初回聞き取りで、とても引っ込み思案だと感じたためNグループに入れるか悩んだ学生は、順調に力を発揮し、グループで一番進んだ学生となった。一方、唯一のピアノ長期経験者は、理解度や技術が高いにもかかわらず伸び悩んだ。

ピアノ実技において、今回の変化で影響が大きかったのは、習熟度ではなく実技指導時間の短縮である。そのため、目標到達が困難であった学生に習熟度別編成がどのように影響したのかわからなかった。

実技指導時間が減ったことは、学生のピアノ実技の到達度の低さに直接影響したと推測される。理由としては、指導時間の減少という物理的な問題のみでなく、時間の減少により指導者の心理的余裕が失われたことにある。本年度は学生との雑談や、行きづまっている学生の気持ちを聞く時間などを全く取ることができなくなっていた。

これらはまた、授業アンケートにおける低い点数を裏付けていると判断される。

初級者がピアノ技術を習得するのは中級者以上に比べて格段に時間がかかる、という事実をふまえて人数配分などを検討し、今後の課題としたい。

(山中和穂)

A, Bグレード：習熟度別グループ編成による実践報告

1. 担当学生の学習状況

第1回の授業で、学生のピアノ学習の状況が確認された後、習熟度別グループが編成された。筆者は、グループ1はAグレード、グループ2はBグレードと、レベルの異なるグループを担当した。グループ1の6名は、小学時代にピアノを習った経験がある、進学が決定してから習い始めた・現在もピアノを習っている・独学だが中学時代に卒業式でピアノ伴奏を担当した等、全くの初心者ではなく、初級レベルの経験をもった学生の集団。一方、グループ2の6名は、全員がピアノもしくはエレクトーンの学習経験者で、基本的な読譜力や演奏能力は備わっていた。

以前は多様な習熟度の学生でグループを構成していたが、基本は個人指導のため教員が各学生のレベルに合わせて異なる指導を行っていたが、本実践においては、習熟度のみならず学生の生活面・精神面等にまで配慮したグループ分けが行われたことが非常に有効だった。以前、筆者が担当したグループは、生活面や精神面でのサポートが必要な学生が複数含まれていたため、ピアノの指導以外に多くの時間を必要としなければならなかった。加えて、グレードごとの規定曲（合格しなければならない曲）が決められていたため、規定曲の合格と学生のサポートの両立が筆者の課題となっていた。しかし、本実践においては、サポートの必要な学生のためのグループが設定されたため、本グループではピアノ指導を中心に授業を進めることが可能になった。また、授業時間を前半後半の2つに分割することを止めたことで個人指導と集団指導の2方向から学生と向き合うことができるようになった。

2. 指導における工夫および留意点

両グループともに、授業は同一の方法で進めた。ピアノの個人指導は学籍番号の一番早い学生から始め、翌週は2番目の学生、翌々週は3番目の学生からというようにずらしていき、1回の授業の中で学生の指導時間にばらつきがあるが、15回全体では全員が、ほぼ同じ時間の指導を受けられるように配慮している。この方法での進め方は、本学（短大および大学）の授業で10年以上続け、これまで学生から異議を申し立てられたことはない。そのため、本実践においても同様に行った（以下の番号は、『大人のためのバイエル教本』に基づく。なお、各楽曲の指導方法については、筆者による調査報告（川端・柴辻，2013）を参照されたい）。

グループ1は、10番台から始める学生（初学者）4名、20番台から始める学生（初級者）2名。毎回、4曲前後の課題を宿題とし、番号順に進めた。ト長調の課題を終えた後は、ヘ長調、ニ長調の課題に進み、初学者の学生を加えて4名が到達した。中間発表では、20番台（1名）、30番台（3名）、40番台（2名）、期末試験では40番台（3名）、50番台（3名）の楽曲を演奏した。最も進度が遅い学生aは、楽譜を読む力はあるが、それを理解し、手を動かし

て弾けるようになるまで相当時間がかかった。そのため課題を厳選し、1曲を分割して仕上げ、反復練習を徹底させた。この指導は、昨年度までの規定曲の縛りがなくなったので可能になった。学生bは、独学でピアノを弾き、器用に演奏することができるが、手の使い方や指づかい等、自己流のため正確性に欠くところがあり、楽譜の読み飛ばしもみられた。そのため、基本的な弾き方と練習方法に重点を置いて指導した。意欲のある学生なので、毎回の課題をきちんと仕上げることで力をつけ、期末試験では、初級では上位レベルとなる第48番「短いお話」を表情豊かに演奏した。

グループ2は、20番台(3名)、40番台(3名)から始めた。20番台の3名は、中級レベルだが、基礎の確認と復習を兼ねて易しい曲を課題とした。中間試験は、40番台(3名)、50番台(1名)、60番台(1名)、期末試験は、50番台(2名)、70番台(1名)、80番台(2名)を弾いた。さらに50番台を終えた学生から、生活の歌を中心に弾き歌いの課題に入った。学生cは、生活の歌を暗譜で2曲(「おはよう」「おかえりのうた」)、保育士資格試験の課題曲となった2曲(「おかあさん」「おばけなんてないさ」)を楽譜を見て仕上げた。一方、学生dは、エレクトーンの経験が長く、読譜力はあるが、同じ鍵盤楽器でもピアノとは弾き方が異なるため、その切り替えがなかなか出来なかった。易しい楽曲に戻りながら復習をし、軌道に乗るまで時間がかかった。こうした学生は、学生bのように、初級グレードでピアノ演奏の基礎を確認し、後期から中級グレードに移動した方が学習の効果が上がると思われる。これは、第1回授業時のレベルチェックの際、教員の判断で注意すべき点としてあげられる。

3. 学生の学習の成果と到達

本実践における大きな変更点は、各グループ内での楽典の授業の実施である。筆者は、毎回の授業の開始20分をそのために充て、課題プリントをもとに、説明、課題の実施と確認等、多角的に指導した。知識のみを詰め込んでも理解につながらないので、学生が弾いている曲と結びつけながら解説した。その結果、中間試験の平均点(50点満点)は、44.5点、期末試験の平均点(50点満点)は、43.7点

であった。ピアノの習熟度と楽典の理解は相関関係にあるため、理解が不十分である箇所を中心に課題の反復の回数を増やし、丁寧な解説を心掛けた。それによって知識を定着させることができ、習熟度別グループは、集団授業において一定の学習効果を発揮したといえるだろう。

第15回の授業では、学生の理解と定着を確認するために、4つの設問、①「楽しかった曲」、②「難しかった曲」、③「達成感のあった曲」、④「挑戦したい曲」に具体的な曲と簡単なコメントを記入してもらった。その結果、学生の不安や自信、学習成果や学びへの意欲等、そこから読み取ることができた。

学生aは、第24番について、②で挙げ、③で「難しかったこそその達成感!!」と記している。これは、5月から6月まで4週間かけて仕上げた曲で、学生aにとって最初の学習の壁だったが、これを克服したことで自信がついた。期末試験曲も学生にとっては難しい曲で、やはり4週間かけて地道に練習を続けた。学生本人も口にしてはいたが、コツコツと努力すれば必ず弾けるようになるという成功体験があったため、壁を突破することができた。

また、多くの学生が言及していたのが、第48番「短いお話」である。「メロディーも好きだったけど、最後のドからドまで下がっていくのが楽しかった」「左手がものすごく難しかった」「弾けるようになるまで時間がかかった」「左手の音が一つ下がったりと変化があったので難しかった」「テンポがとてよくて、弾いていてとても楽しかった。結構、苦戦したけど、練習していくうちに弾けるようになって達成感があった」。グレードに関係なく、学生にとって達成感が得られる課題だったようだ。

さらに、グループ2の学生は、楽曲に対してより率直に自身の気持ちを表現していた。「難しかったけど、強弱を弾きながら考えてとても達成感があった」「弾いていて穏やかな気持ちになった」「#が慣れなかったので合格したときは嬉しかった」「リズムが好きで弾いていて楽しかった」、「和音が結構変わるので難しかった」「知っている曲だけど、思ったよりも難しく出来た時、達成感があった」等、グループ1の学生より楽曲の特徴を捉え、理解していたと言える。

4. まとめ

以上のように、学生にとって何かしらの達成感を得ることが上達のきっかけになることは明らかである。個人指導においては弾き方という技術的な面とともに、各学生の学習意欲が高まる到達点を具体的に示していくことが上達の早道であると考えている。それは、同レベルの学生と学ぶことで各自の目標が立てやすくなり、学生のレベルに応じた集団授業が理解を深める。習熟度別グループ編成を導入したことで、それが明確に実践できたと言えるだろう。(柴辻純子)

B グレード：保育の表現技術Ⅰ. グループ分けについて

1. 習熟度を考慮したグループ分け

音符の読み方や楽譜の決まり(楽典)を理解し、それをピアノという楽器に移行して弾くということは、言葉の読み書きを覚えたり、初めて自転車に乗ったりするのと同じように、理論と実践を一体化させなくてはならず、繰り返し自分の指を動かして練習することが必要である。

この楽典の理解やピアノを弾く作業は、経験の有無により大きな差が生じるものである。

習熟度別グループ編成にすることにより、同じ課題をこなしていることで、心の負担(焦り)も減り、努力(練習)の必要性も感じてもらえると思うし、より適切な指導につながると考える。

2. グループと学生の概要

学生にピアノや音楽に関するアンケートを実施し、第1回でレベルを確認してグループ分けをし、第2回より習熟度別グループによる授業がスタートした。

筆者の担当は、初心者よりは弾ける中級レベルの学生である。

(1) グループ1 (7名)

- a : 両手奏は出来るが譜読みが苦手。
- b : 打鍵が強く全ての曲が行進曲になってしまう。
- c : ゆっくり、ゆっくりと進む学生。
- d : 自力で課題をこなせる学生。
- e : ピアノは弾けるが運指に問題がある。年齢が高く他学生との関わりに溝があるように感じた。

f, g : 初心者同様レベルで、このグループに入ったことに違和感を持っていた。

(2) グループ2 (6名)

- h : 最低限必要なことをやる。
- i, j : 習熟度は進んでいるが適当な演奏でミスが多い。
- k, l : 習熟度は低いがコツコツと努力し進めた。
- m : 努力を苦手とするようで、自らを責めながら授業を受けていた。

3. これまでの問題点

以前は、多様な習熟度の学生によるグループ編成であったため、初心者から上級者まで混在していた。基本的には個人レッスンなので技術指導を行う上での問題はないが、どのレベルも同じ課題(曲数)を終わらせることは、多少課題を考慮しても、初心者の負担は大きかった。

レッスン時間の平等を考え、ローテーションを組んでも、初心者の対応には時間が取られ、後者へと影響してしまう。それでも初心者がピアノに向かい易い状況を作る為に、もっと対応する時間が必要だと感じていた。逆に、中、上級者は基礎にとらわれずに、保育に必要な課題に取り組みさせて良いのではないかと考えていた。

4. 習熟度別指導における工夫および留意点

ほぼ同じ習熟度の学生ということで課題の説明などはしやすかったが、習熟度別の意味のきちんとした理解が浸透していなかった為、不都合も生じた。

学生 f, g は、自分たちのレベルが低いことで「このグループには入れられない」と言い、やる気も起きない様子だった。しかし、「自分のレッスンが長引くとほかの学生に迷惑だから、最後にして欲しい。昼休みにまた来る。」と少しずつ前向きな申し出に変わってきた。その小さなやる気を逃さぬよう、ローテーション順で1回聴き、必要な指導をして再度昼休みにレッスンをした。各々の学生が自分のために努力すれば、それで良いことを常に伝え、出来るようになったことを認める言葉をかけ指導を続けた。

学生 m は、練習できない自分を叱って欲しい、と言ってきた。なぜ練習ができないのか、筆者が叱る

ことでどう変わるのか、など話をした。怒らない筆者を、優しい先生だ！という学生に、優しいわけではなく、何故練習が必要なのか、自分がどうすべきなのか、全部分かっているのだから、怒る必要はない、自分自身で解決できるはずだから頑張ってみようにと指導した。その後、「ダメだ、弾けない！皆において行かれる。」と騒ぎつつも課題をこなした。

楽典は授業始めの15～20分を使い行った。必要な要点を分かりやすく説明するよう心掛けた。次週には復習プリントを配り、その結果で再度説明し、学生のレベルに合わせた。

楽典のプリントを行ううちに学生同士での教え合いが始まり、ピアノのレッスンでもお互いに褒め合ったりして、活気とまとまりがでてきた。

学生 e, f, g, h もこの時間があり、グループに馴染み会話も増えたと感じる。筆者も同様で、全員との対面授業で個人レッスンではできないコミュニケーションが生じ、全体の指導に効果があったと感じる。

5. 結果と考察

習熟度別のグループで授業をして、楽典などは無理なく進めることができた。個人レッスンだけでないグループのまとまりや活気が生まれ、学生同士のつながりも良くなったと感じる。ピアノ小テストでも2回目の方が自信のある演奏になり、楽典のテストやプリントも良い点数が取れていた。グループの雰囲気や学生が皆それぞれの努力をしたことは評価に値するし、学生自身も技術の向上を実感していた。経験者が高く評価されるのではなく、それぞれの習熟度に応じた努力を評価するという目的は、筆者の担当したグループでは達成できたと思う。

6. 今後の課題

習熟度別のグループの分け方はとても難しい。本実践におけるクラス分けの方法にプラスして、学生のアンケートに自らが望むグレードを記入してもらったり、2～3週目まではグループの変更が出来るような対応をしたりすることも必要であろう。また、グループ分けの意味とねらいについて、自分の努力がそのまま評価となる、他者と比べる評価ではない、ということや学生により深く理解させたい。

さらに、前期の結果と後期の授業に一貫性を持たせ、より良いピアノ教育にしたい。

無理な課題はやる気を失くすが、ある程度の課題を努力して達成することは、自信につながり実力となる。前・後期を通して的確なクラス分けと適切な課題提示を検討していく事が今後必要である。技術は繰り返すことで必ず上達する。千差万別ではあるが学生各々のレベルを引き上げ、楽しさも感じてもらえるよう、さらなる努力と工夫を惜しまず指導して行くことが筆者の課題である。(石橋葉子)

Cグレード：中級以上のグループの実践報告

習熟度別グループ編成により、筆者はCグレード(中級以上)を担当した。読譜、両手での演奏能力は特に問題がない学生のグループである。

1. グループと学生の概要

(1) グループ1 (7名)

- a : よく弾ける、練習量に波がある。
- b : おとなしい性格、口数が少ない、譜読みに時間がかかる。
- c : 理解力はある、指先が少し硬い。
- d : 譜読みはよくできるが楽典の試験はケアレスミスが多い。
- e : このクラスの中では進みが遅い方。
- f : 真面目に取り組んでいるが少し緊張しやすい。
- g : このクラスでは進みが早い方、よく練習してある。

(2) グループ2 (7名)

- h : このクラスでは進みが遅い方、積極的に質問をする。
- i : 緊張しやすい、よく練習はしてある。
- j : 進みは早い方。
- k : 譜読みは問題なし、細かい注意をよくした。
- l : 明るい性格、積極的によく進んだ。
- m : 一番進みは早かったが練習量が多いとは言えず、欠席もあり。
- n : 楽典はよく理解している、真面目。

2. これまでの問題点

以前の混合グループだと、進みの遅い学生に時間を取られ、進みの早い学生とのレッスン時間に差が

あった。特に譜読みに時間のかかる学生がいると一緒に譜読みをしたり片手練習をしたり弾けるようになる感触を得られるまでの期間が長く、意欲も損ねないようにしなければならなかった。

3. 習熟度別指導における工夫および留意点

Cグレードということで、音符が読めない学生はいなかった。ただ楽譜の隅々まで細かく見ているか、音楽として綺麗に弾けているかは各学生に差があるように思えたので、細かい指導を心掛けた。強弱などの記号の理解は楽典の理解とも繋がるので、頭で理解するだけでなく、音の表現として伝わる演奏ができていないか、少し大きめに表現してみることをよく指導した。それに加え、安定したテンポも大事な演奏上の技術なので、後期の課題となる歌唱伴奏の事も想定して、その曲に合ったテンポと、安定したテンポを保つことをよく指導した。それでも、譜読みの遅い学生はいるので、全員同じ指導というわけにはいかず、どのように音楽的な表現に近づけるか学生hを例に述べる。

譜読みは問題なく、左手が一定の伴奏パターンの曲もよく弾けていた。2拍子、6拍子の曲が出てくると音符、休符の長さが曖昧であったため、一緒に数えたり、両手の揃うところを確認したりした。楽譜の書き込みも増えていったので自主練習の間に疑問に感じたところは毎週のように質問するようになり、前期の後半には進むペースも上がってきた。コミュニケーションが増え、この学生との関わり方に変化も生じた。中間発表の頃はまだ自信をもって演奏することができなかったのか、弾き直しも多く音楽の流れもよくなかったが、2回目の発表の時にはしっかりと演奏した。他の学生より遅めだという自覚があったようだが意欲も徐々に上がり、最終的に目標の課題まで終えることができた。

4. 結果と考察

コミュニケーションをどのように取りながら進めるかは大事である。学生hのようにコミュニケーションが増えていき、他の学生も含めクラス全体がいい方向に向かうことができたのはこのグループの特徴もあったかと思われる。もう一方のグループも真面目に取り組み、決して遅かったわけではないが

個々の性格の違いもあったせいも、比較的落ちついた学生が多く、周りに流されず進めたため、一律の進み具合であった。グループの雰囲気、性格で進度に違いがあるのは例年よくあることである。毎週、個々に細かい課題を提示しながら音楽的な表現の指導まで進められるのは、Cグレードでも、ごく一部の学生になる。

5. まとめ

習熟度別グループ編成を行ったことにより、周りの状況と、目標が明確に見えてくるグループの雰囲気になりやすいので以前に比べて効果はあったようにみえる。他のグループより進度は早かったと思われるが、間違えずに演奏するだけでなく音楽表現的な課題、将来の職業につながる応用力等、中級以上のクラスでも個々の課題や問題点は多くあるので、工夫しながら習熟度別グループ編成は続けていけると良いだろう。(水村明子)

Ⅲ 総括

1. 総合考察

(1) 指導時間とグループ編成方法の問題

本稿では、短期大学保育者養成課程1年生のピアノの授業における習熟度別グループ編成の効果と問題点を整理した。演奏技能習得において習熟度別指導が有効であることは明らかであり、これまで問題とされた指導時間の不平等も是正されたため、今後とも継続するに値すると判断された。

以前のグループ編成は、多様な習熟度の学生により構成されていた。この編成においては、初学者ほど指導に時間がかかり、習熟度が上がるにつれ受講時間が短くなるということが全てのグループで起こっており、学習環境の保障の点で問題があった。

そこで、習熟度別グループ編成を実践した結果、同一グループの学生が同程度の習熟度であることから、指導時間も必然的に同程度になり、時間配分の問題は是正された。しかし同時に、初学者のみのグループでは、これまでと同じ担当人数では全員が指導不十分になってしまうことが新たな問題となった。

専任教員が担当するグループには、ピアノ初学者に加え、学修上の配慮が必要な学生を含めることと

した。その結果、大学進学という環境の大きな変化に適応するまでに他者より長い時間がかかる学生に対しても、他教科の専任教員と連携し、個別に配慮しながら支援することが可能となった。このように、保育者養成課程におけるピアノ教育は、ピアノ演奏指導のみに焦点化できない側面がある。学校教育の1教科としてのピアノ教育であることは、ピアノ教室での指導とは留意点異なることが再確認された。

(2) 習熟度が同程度の学生による協同学習

グループ内で学生同士の教え合い・学び合いは、グループ編成の方法にかかわらず自然に発生するし、また教員から共に練習する課題を課す場合もある。習熟度別グループ編成にした結果、教えてあげる-教えてもらうという上下関係ではなく、共に確認し合い、質問し合い、一緒に練習するという平等な関係での協同学習が生まれた。友人や教員へ質問や相談もしやすく、一緒に頑張ろうという連帯感や意欲にもつながり、切磋琢磨する関係性に発展する事例もあった。しかし、授業が進む過程で、習熟度別グループであるにも関わらず途中でさらに進度および習熟度に差が開いていくこともある。こうした場合には劣等感が強まり、意欲が減退していく事例もあった。

2. 今後の課題

課題は3点ある。第一点は、各グレードの適正人数である。習熟度の低いグループでは一人当たりの指導に時間がかかるため、なるべく少人数が望ましい。すると習熟度の高いグループは人数を多くせざるを得ない。次期はそうした編成を試みるが、たとえ演奏技能の習熟度が高くても、保育者として必要な音楽的な感性や実践力に関して、より高次の学習は必要であり、全員に十分な指導をするにはやはり限界がある。

第二点は、配属グループの決定方法である。次期

は、学生の希望も反映させることを試みたい。学習への主体性や意欲・満足度等が向上し、習熟度も向上することが期待できるためである。その際、途中でグループを変更できる期間を設けることも提案された。

第三点は、評価方法である。現在、評価の観点は、演奏技能習熟度・課題達成度だけでなく学習意欲や履修態度等、主体性についても含めている。また、同一教科を8名の教員により評価する。評価基準についてある程度の指標は設けてあるものの、複数の人間による評価では、機械的に均一な採点は不可能である。しかし、平等な評価をするために実技試験の演奏結果のみを重視すると、学習過程を評価することが出来なくなる。つまり、幼児期からピアノを学習しており習熟度は高いが意欲や履修態度に問題がある場合と、初学者だが常に意欲的に学び、進度は遅いが着実に技能を習得した場合とでは、前者の方が高評価になる。しかし、学校教育における評価として、これは妥当ではない。学びに向かう姿勢も含めて評価するために個別の絶対評価を採用したいが、この場合、複数の教員による平等な評価を可能にする基準および観点の整備が必要である。今後の課題とする。

参考文献

- 明石要一・石川康浩 (2003) 『学級教育の改革シリーズ4 習熟度別授業は学力を高める』, 明治図書
 川端眞由美・柴辻純子 (2013) 「保育者・教員養成課程における音楽科目の指導法研究—植草学園大学発達教育学部における現状と今後の課題に向けて—」『植草学園大学紀要』, vol.5, pp.91-93
 北村恵子・平澤節子 (2009) 「幼児教育者養成における音楽教育について」『上田女子短期大学紀要』, vol.32, pp.97-108
 佐藤学 (2004) 『習熟度別指導の何が問題か』, 岩波ブックレットNo.612, 岩波書店
 藤間渉・中平勝子 (2014) 「習熟度別学習支援のための聴覚情報を併用した読譜時の注視点分析」, 情報処理学会, 第76回全国大会講演論文集 2014 (1), pp.649-650

